
サンタクロースが来る所

夕霧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サンタクロースが来る所

【Nコード】

N7147P

【作者名】

夕霧

【あらすじ】

人々が笑い、笑顔が溢れるクリスマス。
そんな中、別世界にいるような一人の少年。
誰も少年を気にも留めない中。
一人の老人が少年を見つける。
私が思うサンタクロースを書いてみた

小さい頃の俺

寒い

町は煌びやかなイルミネーションで飾りつけられ、家族やカップル、友人連れなどで溢れかえっていた。

天気は雲ひとつない快晴で、まだ午前中だというのにカラフルな電燈が輝き、人々の目を楽しませている。

笑顔や笑い声で満ちている中で、幼い少年が一人、マフラーや手袋も付けず、薄手のコートだけを着て歩いていた。

年の割には不似合いな無表情で、まるで一人別世界にいるようだ。

「メリークリスマス！」

誰もが少年の存在など気にも止めずすれ違って行く中、突然赤い服を着た人物が少年の前に何かを突き付けてきた。

安っぽく全く寒さをしのげそうにない赤い服に少し引つ張っただけでも取れそうな白い付け髭

この時期何処にでも出没するバイトのサンタクロース。

差し出されたのは袋詰めにしたお菓子の詰め合わせ。

バイトのサンタクロースはにこにこ笑顔を浮かべ、少年にお菓子を差し出している。

しかし少年はお菓子には全く目もくれず、バイトのサンタをじっと見つめている。

「メ、メリークリスマス！」

少年がお菓子を受け取ろうとする気配が全く無いので、それを促すようにサンタがもう一度言った。

すると少年はにっこりと笑顔を浮かべ、それを見たバイトのサンタが安堵したように笑う。

「お髭が白いのに眉が黒いよ？にせものさん」

そう言い放った少年の声は、高くかわいらしいものののに、どこか馬鹿にしたようで冷たい。

バイトのサンタは驚いて手に持っていた袋を落とした。

少年はその様子を見て、くすくす笑いながらその場を去って行った。

「にせものさん、にせものさん、お仕事がんばってね」

寒い

その光景を気にとめるものは居ない。

ただ一人、ベンチに腰掛けた老人が、すぐに表情が消えた少年をじっと見つめていた。

腰に付けられている鈴が、チリン、と小さく音をたてた。

少年がしばらく歩いていると、前にあるベンチに老人がひとり座っていたが、気にする様子もなく少年は通り過ぎようとした。

「サンタクロースが嫌いなのかい？」

突然そう言った老人の前で少年が足を止める。
少年は老人の方へ眼を向け、にっこりと笑う。

「僕に聞いているの？」

「そうだよ」

「どうしてそんなことを聞くの？」

「さっきのを見てしまったね」

すると少年は眉を下げ、わざとらしく声を高くして老人から遠ざかるように後ずさる。

「うわぁ、おじいさん僕のストーカーってやつ？こわぁい！」

「うーん、若い子の後を付け回すぐらいの体力はもう無いのぉ」

少年の態度を気にすることもなく、老人はただでさえ皺だらけの顔を更にくしゃくしゃにして笑った。

そして、少年の顔をじつと見つめ、優しく目を細める。

「君は、人が嫌いなんだね」

そう老人が言った途端に、少年の表情が一瞬で消えさり、目が冷たくなった。

「何？説教でもする気？っていうかさっきの見てたんなら後付いて来たんでしょ？マジきもい」

「違う、と言わないってことは、人が嫌いなんだね？」

少年の話など気にも留めないような様子の老人に、少年は不機嫌そうに顔を歪めてため息を吐いた。

「そうだよ。嫌いだよ。皆嫌い」

「…そうか」

老人は悲しそうに顔を伏せる。

「僕のことかわいそうって思ってる？ぷぷ！ぜんぜんかわいそうじゃないよ！だって僕へーきだもん」

「わたしにはとてもそうは見えないよ」

「僕の何を知ってるの？」

「少なくとも君が寂しがっていることは分かるよ」

「マジきもい」

少年は冷たく言い放つと、老人に背を向けた。

「ああ、待っておくれ。もう一つ、」

「…」

「今日は雪が降るから、暖かくして寝るんだよ」

少年は、はっと馬鹿にしたように鼻で笑い、老人の方へ振り返った。

「寂しがってるのはおじいさんじゃん」

そう言い残して走り去っていく。

小さくなっていく背中が、見えなくなるまで老人は少年を見つめていた。

「笑って、いとしい子」

鈴がまた、チリン、と音を立てた。

寒い

空は雲ひとつない、快晴

小さい頃の俺（後書き）

ちょっとファンタジーかもしれない

まあ、珍しくもない家庭

家に帰ると父が居なかった。

部屋は台風でも起きたかのように散らかり、あちこちにガラスや皿の破片が散らばっていていた。

その部屋の真ん中で、母が沈黙のまま座っていた。

4年前の出来事なので少しその様子が曖昧になってきたが

あの凍える様な家の寒さは、今でも鮮明に覚えている。

寒い

靴から家の鍵を取り出し、扉を空ける。

少年、聖は家に帰っても、ただいまとは言わない。
だれも、おかえりと返してくれないからだ。

誰も居ない家は冷え切っているのにも関わらず、聖は気にすることなくコートを脱ぎダイニングへ向かう。

大きなソファにコートをかけ、テーブルへと目を向けた。

そこにあつたのはたくさんさんの冷凍食品やお菓子、飲み物。横には5千円札とメモが置いてあった。

『今日は、帰らない』

たった一言書かれたメモ。

「…今日も、じゃん」

メモをくしゃりと潰し、ゴミ箱へ投げ捨てる。

同じように丸め潰されたメモが溢れかえっていた。

リモコンに手を伸ばし、テレビをつける。

画面に映し出されたのは、女性キヤスター。

寒い中、しっかりとコートを着込んではいるが、鼻や頬が寒さで赤くなっていた。

『今日は待ちに待ったクリスマス。ご覧ください、町はすでに賑わっており、イルミネーションがとっても綺麗です！さて皆さんは今年のクリスマス、誰とお過ごしになりますか？わたしは家族と過ごすつもりです！お出かけの方もいらっしゃるようなので、しっかりと防寒してくださいね。外はとっても寒いですよ！ですが残念なことに今年は雲ひとつない快晴で、雪が降る気配は全く無く……』

ブツッ

と音を立てて画面が真っ黒になる。

『誰とお過ごしになりますか？』

聖の頭の中で先ほどの女性キャスターの言葉が響く。

彼はぎりっと唇を噛みしめ、リモコンを持った手を思いっきり振り上げた。

ガシャンと音を立てたそれは、中から電池が飛び出し、ころころと冷たい床を転がっていく。

「へーき、だ」

誰もいない家で聖はぽつりと呟く。

「へーき、僕はへーき」

呪文のように繰り返す。

「へーき、ひとりでへーき」

「…へーき」

寂しいと手を伸ばしたって、冷たく振り払われるだけなんだから

後で電子レンジで温めた冷凍のグラタンは、何故がしょっぱい塩水の味がした

寒い

まあ、珍しくもない家庭（後書き）

暗いなあ
…

こつなつたきっかけ

寒い

戸締りの確認を終え、薄手のパジャマを着て、冷たい廊下を裸足で歩く。

部屋の扉を空け、窓のカーテンを閉めた。

聖の部屋は年頃の少年にしては物が少なく、ベッドに本棚、机など必要最低限の物しか置いていない。

ゲームやサッカーボールなど無い、殺風景な部屋。

ただ一つ、机に置かれた写真立てがあつたがその写真立ては伏せられており、中におさめられた写真は見えない。

聖はその伏せられた写真立てを見つめ、手を伸ばし、それを立てようと少し動かしたが、途中で止まり、あと少し動かせば写真が見える状態で止まっている。

しかし、聖は写真を見ることなく、再びそれを伏せて置いた。

小さな体を布団の中へ滑り込ませ、ゆっくり目を閉じる。

何枚も毛布を重ねたというのに、少しも暖かく感じなかった。

体が、心が、冷えきっていた。

チリン

意識が沈んでいく直前、鈴の音が聞こえたのような気がした

ふと、目が覚め、朝なのかと思って窓を見たが、外はまだ暗い。
時計も確認すると、針はまだ2時を指している。

普段ならこんな時間に目を覚ますことはないのだが、妙にはつきり
目が覚めてしまったのだ。
もう一度寝なおそうと寝返りをうつと、目の前に見覚えのない赤い
袋が置いてあった。

「え…？」

その赤い袋には緑のリボンが結ばれている。
起き上がってその袋を手を取った。

こんな物を置いた覚えは全くない。
寝る前にだって無かった。

まさか、

と思って頭をよぎった、あの寒い部屋のなかで、沈黙のまま座り込
んでいた女性。

しかし、聖はすぐにあり得ないと首を振った。

今日は帰らないと言っていた

そもそもプレゼントなんてあの日から一度も

では、一体だれが？

すると窓の外からチリンと音がしたような気がして、驚き慌てて窓の方へ駆け寄り、カーテンを思いっきり空ける。

誰も居なかった

けれど、聖は驚いたように目を見開き、あるものから目を離さない。

マンション7階のベランダ。
そこにあるはずのないものがあつた。

ベランダに積もつた雪の上
足跡と、ソリの様な物を通つた跡

聖は窓を空け、穏やかに雪が降る夜空を見上げた。

チリン

雪が降る夜空を駆けていく、赤いソリ。
それに乗るのは、暖かそうな赤い服をきて、真っ白な髭が生えた、
眉毛も真っ白な老人。

一人町を歩く聖を見つけた、あの老人だった。

「泣かないで、いとしい子達」

冷たく寒い世界で生きる、こどもたちへ

「わたしには、君達の闇を取り除く事は出来ない。冷たく凍った氷
を全て溶かすことはできない」

理解する事さえ、できないのかもしれない

「嫌いだと思ってくれて構わない、偽善だと言ってくれて構わない」

後はもう

「わたし一人にできることはこれだけなんだ。たったこれだけだ」

祈る、ことしか

「けれどそれでも、たったこれだけでも、君達が、」

でも、本心だから
心から思っているから

「今日だけでも、笑ってくれるなら」

どうか

「わたしは何処にでも行くよ」

笑って、

聖は抱えていた袋のリボンを解く。
リボンを落とさないように手に巻いて、
恐る恐る袋を空ける。

中にあったのは、白いマフラーと白い手袋

そして、一枚のカード

『メリークリスマス、いとしい子　そしてどうか、諦めないで』

袋の中からマフラーと手袋を取り出し、首に巻き、手にはめる。
薄手のパジャマにマフラーと手袋。
変な格好をした自分に、聖が小さく吹いた。

寒い

寒かった、日

「
…あつ
たかい
…」

笑って、
いとしい子

わらって

机に置かれていた写真立ては、ちゃんと立てられ、そこには優しい顔で笑う男女と

その真ん中で、満面の笑顔で笑う小さな少年が写っていた。

そして写真立ての前に、もう一つのカードが

『手を伸ばすことを諦めないで、この世に変わらないものは無いんだよ』

小さく微笑みながら空を見上げる聖が、それに気付くのは、もう少し後のこと

こつなつたきっかけ（後書き）

偽善過ぎ、夢見過ぎ、分かってます。
それでもわたしが思うサンタクロース。

本物は、孤独な子の所に来てくれる。

そして今の俺

聖、サントクロースになりました！

「新米サントクロースな」

一言多いイケメンな相棒と。

まあ親が離婚して最高に性格がひねくれていたあの時、俺の元に本

物のサンタクロースがやって来た。

よく来てくれたもんだあんなクソ生意気なガキだった俺のところに。

あれから12年経った今、俺は大学へと進学し、友達とふざけ合ったりバイトに明け暮れてたり、普通の生活を送っている。

ただ一つ普通じゃないと言えば

サンタクロースであること

バイトじゃなくて本当に真面目な感じで。

もちろんそれが本職な訳ない。

裏の職業ってやつだ、スパイみたいでカッコ良くな？

始まりは今から二年前。

大学への進学が決まり、浮かれていた時に、突然黒スーツを着た怪しい訪問者が現れた。

男は人の良い笑みを浮かべているがあやしさを全開なオーラを感じ、こいつは悪徳業者に違いないと察した俺はすぐに追い返そうとした。

だが男は必死な様子で俺を引き留めた。

あまりの必死さに、まあ話だけでも聞いてやるかと思ったのだ。すると男は名刺を差し出し、

「私はこつこつ者です」

『サンタクロース育成委員会』

もちろん俺はすぐさま家から追い出した。

しかし翌日に中学からの付き合いである秀晃ひであきにこの事を話すと。

「俺の所にも来た」

俺と秀晃（通称ヒデ）には共通点がある。

両親が離婚していること。

そして

たった一度だけ、本物のサンタクロースが来たこと。

それから数日後、黒スーツは再び俺の元へやってきた。

「こんにちは」

相変わらず人の良い笑顔。
俺は警戒心丸出しで黒スーツを睨みながらも一応話を聞くことにした。

「この間はすみませんでした。信じてもらえと思って何の証拠も持たず…」

「いや普通信じねえから。てか証拠あんのかよ」

「ええ。貴方がお持ちの**はず**ですよ」

「はあ？」

「10年前の、白いマフラーと白い手袋」

それから話を聞けば、普通ならとても信じられないような内容だっ

た。

サンタクロースは世界中に存在し、各々の国でひっそりと組織を作って活動しているそうだ。

しかし全ての子供の元へ訪れるのではなく、家庭に何らかの事情があり、親からプレゼントを貰えない子供の元に、たった一度だけプレゼントを渡しに行くそうなのだ。

そして黒スーツは新しいサンタクロースになる者をスカウトし、育成する立場にあるというのだ。

もちろん最初俺もヒデもすぐに信じるわけがなかった。

だが黒スーツは10年前に渡されたプレゼント俺のプレゼントを知っていた。

そしてヒデの青いニット帽のことも。

「あんたの話が本当だとして、なんで俺達をスカウトしに来たんだ？」

「まあ普通なら信じてもらえないはなしですから。下手をすると通報までされるんですよ！全く私達が働きにくい世の中になったもんですねえ」

「分かってんじゃねえか」

「でも貴方達の元へ来たでしょう？サンタクロース」

「……」

「だからですよ。新しいサンタクロースのスカウト対象は、彼等がプレゼントを渡した子供。最初は追い出されても信じてもらえなくても、過去の経験から気になって、話ぐらいは聞く気になってくれるでしょう？」

黒スーツはまた笑った。
やっぱり悪徳業者に似たオーラを感じずにはいらなかった。

それでも半信半疑だった俺達を黒スーツはある所へ案内した。
念の為に俺は鉄バット、高校時代剣道部の主将だったヒデは竹刀を
持ってついて行った。

秘密結社（？）の本拠地だ、人がめったに來ない森かなんかに連れ
て行かれるかと思いきや

普通に都会に建っているビル。
しかもでかい。

呆然としている俺に対し、ヒデはいたって冷静。
ちくしょう、頭から足の指先までイケメンな奴だ。

中に入れば普通に受付があって美人なお姉さんが居る。
お姉さんは俺達二人を、じっと見つめた後、にっこりと綺麗な笑顔を
浮かべた。

「ようこそ。貴方達を心から歓迎します」

どうやら、サンタクロースにされることは確定済みらしい

このビルは表上おもちゃの制作会社ということになっているらしい。
黒スーツはここで子供達に渡すプレゼントを作っていると言った。

会社員は思いのほか多く、賑やかで、とても秘密結社とは思えない。

「ここで働いているのは皆、君達と同じなんですよ」

黒スーツは笑っていた。

この賑やかさと黒スーツの笑みが、一瞬、切なく思えた

「さあ、これからが本番です」

黒スーツはそう言うと、どう見ても何も無い壁へ歩いていき、壁に手をついた。

すると忍者屋敷のように長方形に切り抜かれた壁が反転した。

サンタはサンタでもジャパニーズサンタ。

壁の向こう側にはエレベーターがあった。

そこから地下へと降り、俺達が目にしたのは、

表上のビルにあったような精密な機械は無く、そこにあるのは布や木材、紙、鉄、塗料、とにかく色々な材料が置かれていた。

そしてそれらを使い、忙しそうに働く人々。

彼等は手作りで、人の手で、子供たちへの贈り物を作っていた。

人形、衣服、帽子、そして、マフラーや手袋

「これが…」

「私達の本来の仕事です。表上で売っているおもちゃは全て機械で作っていますが、これだけは全て人の手で作ってます」

皆、一生懸命作っていた。

体を塗料だらけにした者、明らかに寝不足で目元に隈ができている者。

布の切れ端や余った木材、プレゼントの設計が細かく書かれた設計図が部屋中に散らばっていて汚かった。

情けなくも、俺は泣くことを我慢できなかった。

部屋の隅にトナカイと明らかに農家のおっちゃんらしき人が居た事
にはあえてつっこまない

そして今の俺（後書き）

無茶苦茶な設定ですがゆるして！

これからの俺

そして早くも二年。

贈り物を制作する仕事と、贈り物を渡しにいく仕事サンタの二通りがあったが俺たちは渡しにいく方を選んだ。

しかし、本当に“サンタクロース”と言えるのは、経験を積み、年をとって髭を伸ばし、髪も髭も眉毛も真っ白になってからだという。ちなみに染めるのは邪道だから禁止。

わからん

新米サントはサントクロースの手伝いが主な仕事。
そこで空飛ぶソリに慣れ、空飛ぶトナカイを躰け、
真のサントクロ
ースになるため修行を積むのだという。

サントクロースというのは職人に近いようだ
ファンタジー要素が盛りだくさんな職人

「そついえば何でソリとトナカイが飛ぶんスカ」
「企業秘密」

…俺、会社員なのに

今日は初めてソリに乗った。
乗るまではワクワクしていた俺だったが、何故慣れる必要があるの
か思い知った。

とにかく空の上は寒い。

しかも速い。

鳥にはぶつかりそうになる。

風が強いから大声をださないと思疎通ができない。
でも口を空けると喉が痛い。

「っていうかなんで都会の上に飛んでもバレねえの!？」

「見えないようになってるんだよ」

「ステルス機能搭載!？」

「使いようによっちゃ兵器だな。不法入国、麻薬売買も簡単」

「サンのくせに発想がこえーよヒデ!!」

そんなこんなで俺たちは頑張っている

「俺スゲー気になってるんですけど師匠」
「何をだい？」

新米サンタになって初めてのクリスマス。

サンタクロースの手伝いとして俺はソリにプレゼントを乗せたり、ソリとトナカイを繋げたりしながら俺の師匠サンタクロースに尋ねた。

「どうやって親にプレゼントを貰えていない子供を探すんすか？そこらへんまだ教えてもらってないんすけど」

「…見つけるのは年々簡単になっていってるよ。悲しいことにね」

それはつまり、数が増えているということ

「わたし達は子供達の幸せを祈りながら頑張ってる。だがわたし達の仕事が多ければ多いほど、愛情に飢えている子供が多いということだ」

「…それって」
「仕事が減ってくれるとこの老体としてはありがたいけどねえ」

師匠は笑った。

「…俺、なれますかね、サンタクロース」

「珍しい。君が弱気なんて」

「プレゼント配れば良いって仕事じゃないっすから。俺はちゃんと、あの人みたいに、見つけてやれるのかな…」

人々が溢れかえるあの町で、一人歩き、寂しかったくせに寂しくないと自分に嘘をつき続けていた俺を見つけてくれた、あの人のように

「大丈夫だ」

「ほんとっすか」

「ああ」

小さく頃から、他人の寂しさに気づける、君なら

「ところで具体的にどうやって見つけるんスか」
「とにかく歩いて探すんだよ。それらし気がする子を見つけたら、
後を付けてとことん調べるのさ」

それってストーリーカーじゃね？

これからの俺（後書き）

終わりです。

実にアホなオチ（オチになってる？）で実にサーセンした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7147p/>

サンタクロースが来る所

2010年12月31日02時10分発行